

巻頭言

惑星探査の新展開と日本惑星科学会の役割

我が国の本格的な惑星探査が幕を開けた。「はやぶさ」の小惑星探査の成功に続いて、「かぐや」による月探査のすばらしい成果が得られ始めている。我が国において今ほど惑星探査への学界や市民の理解と支援が重要になっている時期はない。1969年のアポロの月着陸以降、米国の独壇場であった月・惑星探査によりやがて我が国独自の貢献が可能になった。私を含む多くの惑星科学に関係する研究者の長年の夢がかなう時代になった。このような我が国の惑星探査を推進してこられた多くの関係者に心から敬意を表したい。惑星探査は、国が多額の資金を投入する大型計画のひとつである。これに伴って、これまでの飛翔体観測などの実施計画の立案プロセスも必然的に変更を迫られつつあるようである。個々の学問分野に閉じた専門的な意義と位置づけのみでは不十分になりつつあるように見える。実施計画には、幅広い学界の支援と社会の理解が不可欠になりつつある。

このような時にこそ、日本惑星科学会が果たすべき役割がますます大きくなっている。私たちの日本惑星科学会は設立後15年以上を経て成熟し、運営も定常状態になっているのを感じる。この学会の果たすべき役割はいったい何であろうか。設立の当初にもどって再確認したい。日本惑星科学会は既存の学会ではない地球惑星科学の連合体のような、新たな融合的な科学としての惑星科学を目指す組織として1992年に立ち上げられた。日本惑星科学会は、既存の地球科学の枠を壊し地球科学を包含する新たな惑星科学を生み出すために、当時既存の学会に満足できなかった研究者が集まって作り上げたものである。しかし、その役割はまだ決して達成されていない。むしろ、我が国の惑星探査が本格化した今、その必要性がますます高まっている。多額の国費を必要とする惑星探査を真に市民と科学者に開かれたものにするために、日本惑星科学会が地球と惑星の科学のコミュニティと市民の声を反映させるための役割を担う必要がある。日本惑星科学会は、産声を上げた我が国の惑星探査を支援し、さらに多くの周辺学会の関係者の支援を得るために地球惑星科学の多くの学会に対して働きかける必要がある。そのための方針と行動計画作り、そしてその実行を期待したい。我が国の大型計画としての惑星探査の進展にタイムリーに対応するためには、日本惑星科学会がイニシアティブをとって活動すること以外には、今のところ代わり得る組織はない。

日本惑星科学会には、定常的で安定な学会運営のみならず、惑星探査を草の根から支援し、さらにこの分野の未来の発展を保証する変革の意識をもった学会運営を行うことを期待したい。これは、日本惑星科学会が普通の学会から設立当初の大志に向かって再び踏み出すことに他ならない。この学会が、そこに集った有能な若手研究者を地球惑星科学の変革のために外に向かって送り出す知的拠点になることこそ、この学会の存在意義であるとさえ思う。我が国の惑星科学の裾野を広げるために、日本惑星科学会とその会員は大きな責任を負っている。会員の皆さんのこの学会外に向けた活発な活動を期待したい。

大谷栄治(東北大学大学院理学研究科)